

「高齢者が地域の未来を担う」

宮古高等学校 三年 佐藤 光

私の将来の夢は、地元で高齢者を使った企業を立ちあげることだ。高齢者の方々に仕事をしてもらうことで、そこに生きがいを感じてもらえることも出来たらと思うている。

私が高齢者について考えたのは、私の祖父母が銭湯を経営していて、多くの高齢者の方に知り合ったのがきっかけである。そこで知り合った高齢者の方々は、とても元気でパワフルである。持て余した時間で、地元の木材を使って家具造りをしたり、伝統的な郷土菓子にアレンジを加えたお菓子づくりをしている。しかし、それらを発表する場所もなく、食べてくれる人もなければ、褒めてくれる人もないとこぼし、銭湯に持ってくる。彼らはそれらの作品の公表とともに、そこに交流を求めてやってくる。今や、高齢者のコミュニティの場となっている銭湯も消えつつある。私はここで育ち、こうした人たちに可愛がられて大きくなった。郷土をあいしているし、そこにいる人々に恩返ししていきたいと思っている。こうした余力のある高齢者の方々の技術をいかしながら、同時に生きがいとなりえる仕事の間を提供できればと考えるようになった。

この夢を考えるようになってから、いろいろな記事が目につくようになった。例えば「尾道デニムプロジェクト」や「三浦真珠」復活のプロジェクトなどがそうである。「尾道デニムプロジェクト」のように無理をしない程度に参加できるような種類のものから、「三浦真珠」復活プロジェクトのように専門家の力をかりなければならぬものまである。

塩の製造にも興味がある。塩で最近ブームになったものに「ろくすけの塩」がある。これは、全国から原材料をしいれて、東京で加工しているらしい。干しシイタケ、昆布、干帆立貝柱：これらは地元でとれるものばかりで、ここにもっと工夫をくわえたら、地元の特産物だけでなくもおいしそうなものができそうである。しかも、もともとの塩は、天気や気候に左右されることなく私達の周りにある海のものであり、宮古にはおいしい水まである。塩は、成功すれば、しようゆ、みそへと製品展開できる。なにより、調味料というもの、各家庭でも必要なものであり、評判になれば、日本中・世界中の飲食店でもつかってもらえるかもしれない。夏場の塩分補給の飲料水にも夢が広がる。この製品に、高齢者の知恵や優しさをブレンドしたものを作ってみたい。

こうしたアイデアの中から、地域の老人の現状にあったもので、しかも他にはないものを考えるためにまず、地域の高齢者の現実をよく知らなければならぬ。そして、企業を立ちあげるための法律的な問題、経営の仕方など大学で学んでいきたいと思っている。

今は、あらゆるアンテナを張り、人間関係を広げて夢の実現に備えている。